

基数詞の複雑さと基数詞の使用:

クルトネの言語変化の応用

奈良昇馬

はじめに

ボードゥアン・ド・クルトネの言語変化の方向性の「言葉をより使用の楽な体系にしたいという気持ち」を考慮すれば言語の数詞の複雑さからその文化圏の数に対する向き合い方を理解できるかどうかを検証する。

数詞を選んだのはほとんどの言語においてほかの単語に比べても使用頻度が高いうえにその言語間ではその使用頻度が通商をする場合、狩猟をする場合などで大きく異なってくると考えたからである。

数詞に関する研究で数値を用いて比較を行う研究は（少なくとも私が調べた範囲では）なかった。

方法

辞書などを用いて語族についても注意しながら各言語における基数詞（今回は1～10とする）を調べその音素（文献に音素としての表記が見つからなかったときは音声記号を数えた）の数を集計・比較する。

結果

中国語はどうしても含めたかったのだがピンインと音素、音声記号との関係を記した資料を発見できずピンインを数え上げたため参考として位置付ける。

フィンランド語がとびぬけて合計の値が大きくマレー語も3番手のアイヌ語と6個と差は大きめ。3番目から7番目までほとんど差がないのは特徴的。

ハワイ語、日本語、タイ語は7番目からは差があるがその中では差がない。

結論：ある言語の基数詞の音素数はその言語の基数詞使用の実態を示唆しない。

	German	Ainu	Swahili	Finnish	Thai	Mongolian	Basque	Malay	Japanese	Hawaiian	Chinese*
1	4	5	4	4	3	3	3	4	4	4	2
2	5	3	5	5	4	4	2	3	2	3	2
3	4	3	4	5	4	5	4	4	3	4	3
4	4	4	3	5	3	5	3	5	2	3	2
5	4	4	4	5	3	3	4	4	2	4	2
6	4	4	4	5	3	6	3	4	4	3	3
7	5	5	4	9	3	5	5	5	5	4	2
8	3	5	4	9	4	4	5	5	5	4	2
9	4	7	4	8	3	2	8	8	4	3	3
10	5	3	4	8	3	4	5	7	3	4	3
Sum	42	43	40	63	33	41	42	49	34	36	24

表1 各言語の集計結果をまとめた表

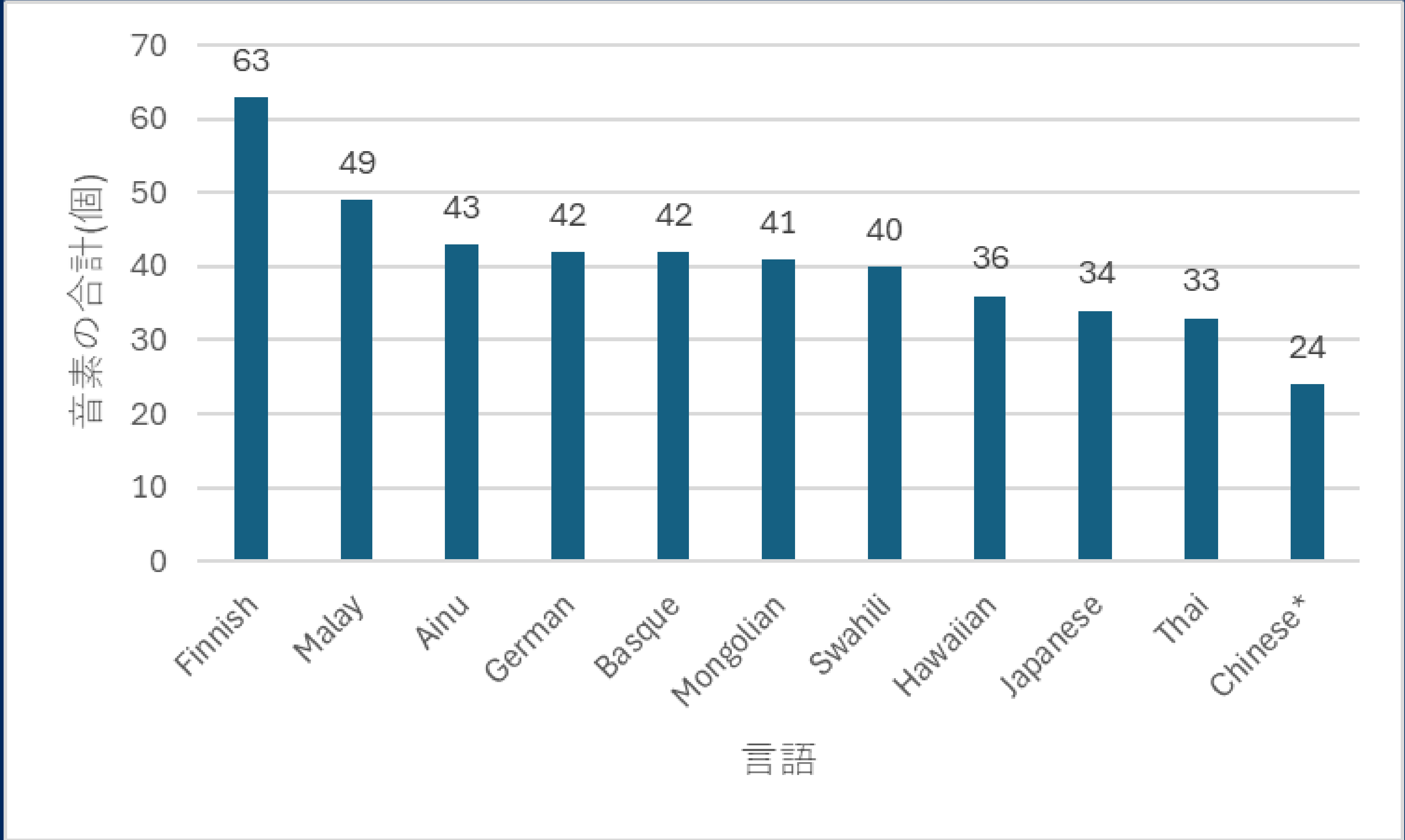


表2 各言語において1～10を構成する音素の合計

考察

私が考えたとおりであれば結果からフィンランド語とマレー語は基数詞の使用頻度が低く話者たちは数に親しみがないということになる。

そこで各言語について調べてみる。

フィンランド語:

フィンランド語はエストニア語と同じ後期フィン祖語から派生しており、またサーミ語とマリ語が系統樹的には近いのだが（亀井孝, 河野六郎, 千野栄一, 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編（上）』, 三省堂, 1989-848 表3）を参照するとエストニア語、サーミ語、マリ語も長いには長いのだがフィンランド語ほどではなくこの突出した長さはフィンランド語が後期フィン祖語から派生した際の産物だと考察できる。（北村甫,, 『講座言語 第6巻 世界の言語』, 大修館書店, 1981-103,104）によれば何進法で数えるかというのに由来するらしく何らかの特徴を捉えていそうではあるがは政治に増えたことなど不可解な部分もあり予想通りに行ったとはいいがたい。

マレー語:

標準ムラユ語（マレー語）は本来のムラユ語の2次的諸変種とされているのだが

ムラユ語が、このように2次的分布を拡張しえたのは、次のような理由によると考えられる。

1) ムラユ語の原分布が、東西交通の要衝であるマラッカ海峡を囲繞する地域にあったこと、

2) ムラユ語の音素体系と形態法とがかんそであること、

3) ムラユ語が、わずかな膠着語的特徴を除いて、概して孤立語的で、他言語の単語を借入しやすいこと、など。

（亀井孝, 河野六郎, 千野栄一, 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編（下-2）』, 三省堂, 1992 365,366より）

とあり簡単にフレキシブルさがあり交通の幼少となる地域で使われ広まった言語が数に親しみのない言語だろうか。かなり疑わしいと言って差し支えない。

おわりに

簡潔にまとめると今回集計して導いた数値はその言語の話者の文化について何も語り得ないということである。

文献

北村甫,, 講座言語 第6巻 世界の言語, 大修館書店, 1981-103,104

亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 言語学大辞典 第4巻 世界言語編（下-2）, 三省堂, 1992-365,366

亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 言語学大辞典 第1巻 世界言語編（上）, 三省堂, 1989-848